

令和4年度地域日本語教育コーディネーター研修
実践活動報告

「日本語教師と日本語交流員の効果的な
協働の在り方」

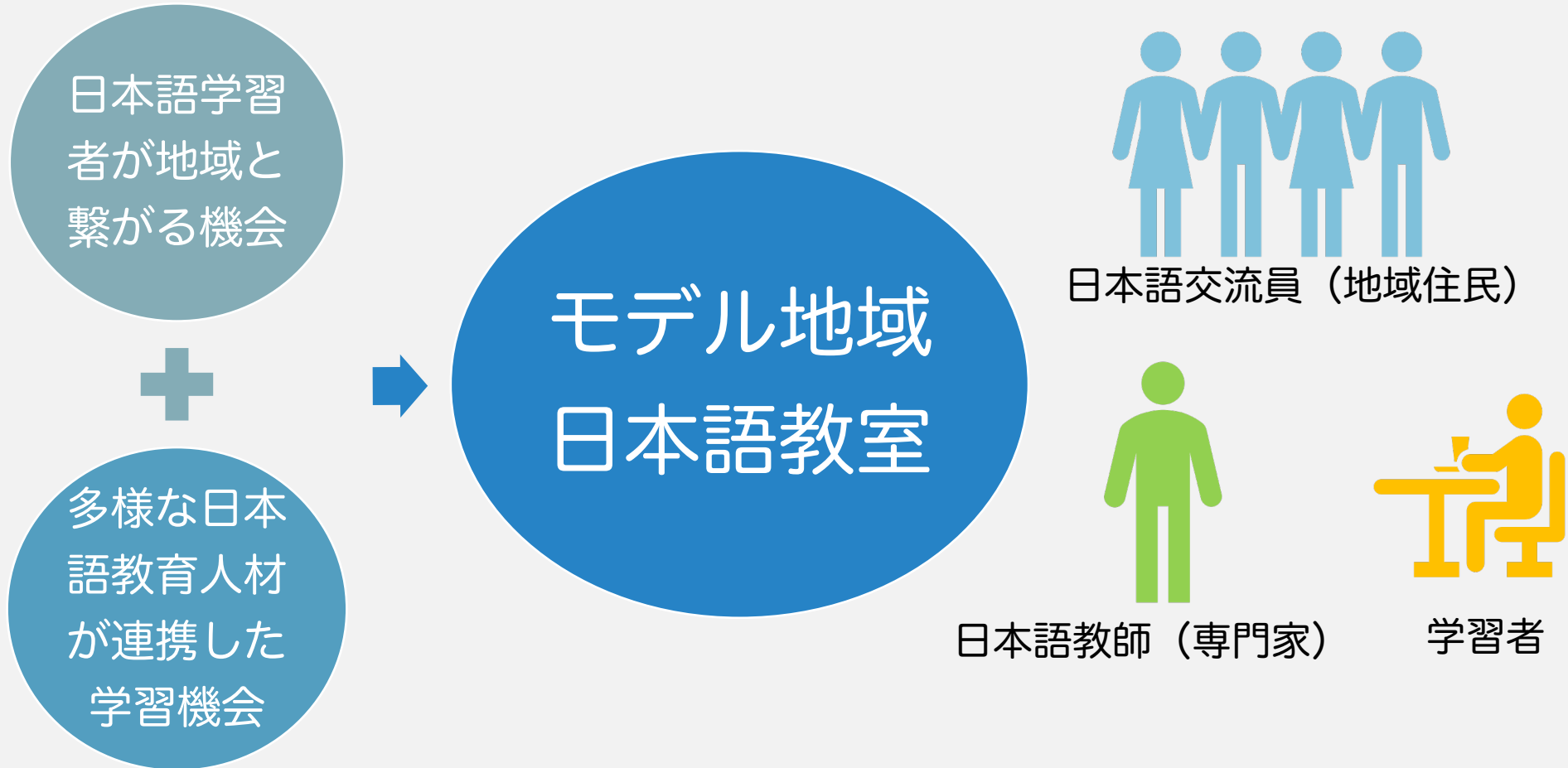
2023年2月7日(火)

東17 岩崎容子

(長野県地域日本語教育コーディネーター)

1. 課題設定の背景

長野県で現在取り組んでいる「地域日本語教室創出支援事業」



担当地域のモデル地域日本語教室について（R4）

名称：佐久市日本語教室（長野県佐久市）

場所：佐久平交流センター

期間：2022年7月9日(土)～12月17日(土)（全14回）

日程：月2、3回、土曜日9時30分～11時30分（支援者は9時15分～11時45分）

学習者：定員20名

（申込時：中国3、インドネシア6、ベトナム6、ドイツ1、ブラジル1、ボリビア1）

支援者：教師2名、交流員13名、コーディネーター1名

目的：より快適に暮らすために必要な日本語や地域文化を学ぶ

（地域住民と外国籍住民の相互理解の向上）

使用教材：『できる？できた！！くらしのにほんご』（兵庫県国際交流協会）、
『いろどり』（国際交流基金）



2年間のモデル教室実施期間が修了するにあたり、
改めて効果的な協働について考えるべく研修課題として設定した。

2. 実践の内容



日本語教師と日本語交流員が効果的に協働していくためには
どうしたらよいのだろう・・・

コロナ禍の影響から、2年を通し教師と交流員の対話の機会がほとんど
取れていなかった。まずは、顔を合わせて話すことが必要では？



年度の途中で中間報告交流会を開催し、そこでインタビュー形式の
アンケート調査を実施。

リラックスした雰囲気の中でのグループインタビュー形式とすること
で、日本語教師、日本語交流員それぞれの立場で感じていること
を直接聞き取る。聞き取った内容をまとめ、今後の教室運営の手が
かりとする。

3. 実践の流れ



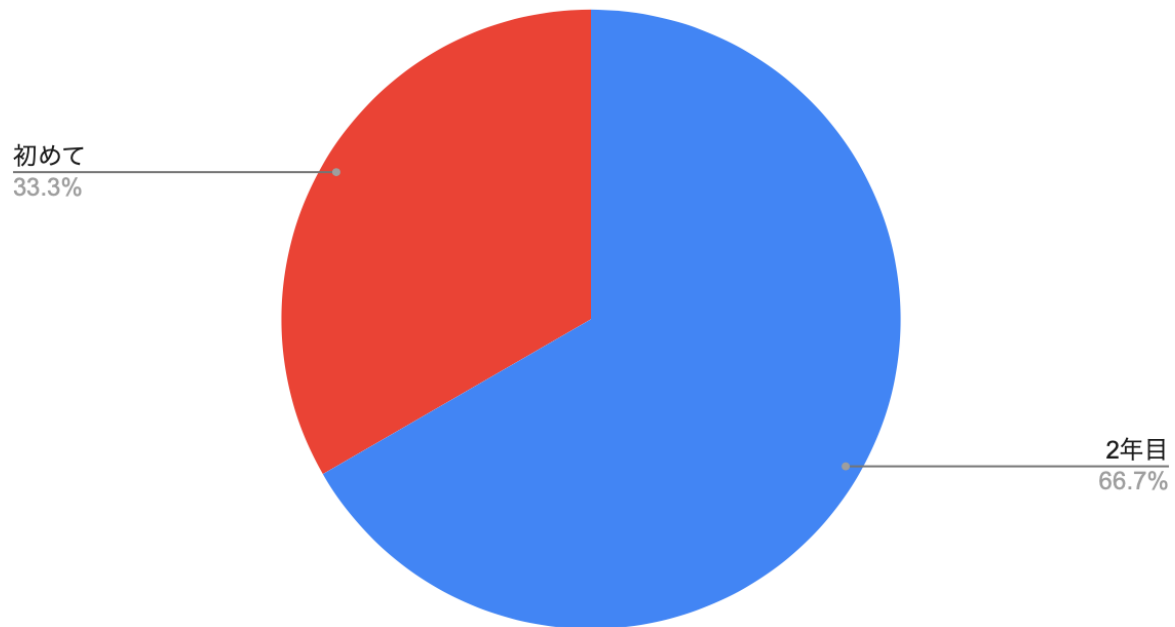
- ① 日本語教師と日本語交流員の協働に関するアンケートを作成
- ② 支援者交流会内でインタビュー形式によるアンケート調査を行う
- ③ アンケート結果とインタビュー内容をまとめ、年度末のふりかえりの際に全員と共有
- ④ 県が行う年度末アンケートと合わせて、2者の効果的な協働にについて考察する
- ⑤ 考察した内容を、モデル教室後の自走教室立ち上げや、今後のモデル教室事業の参考とする

アンケート調査について

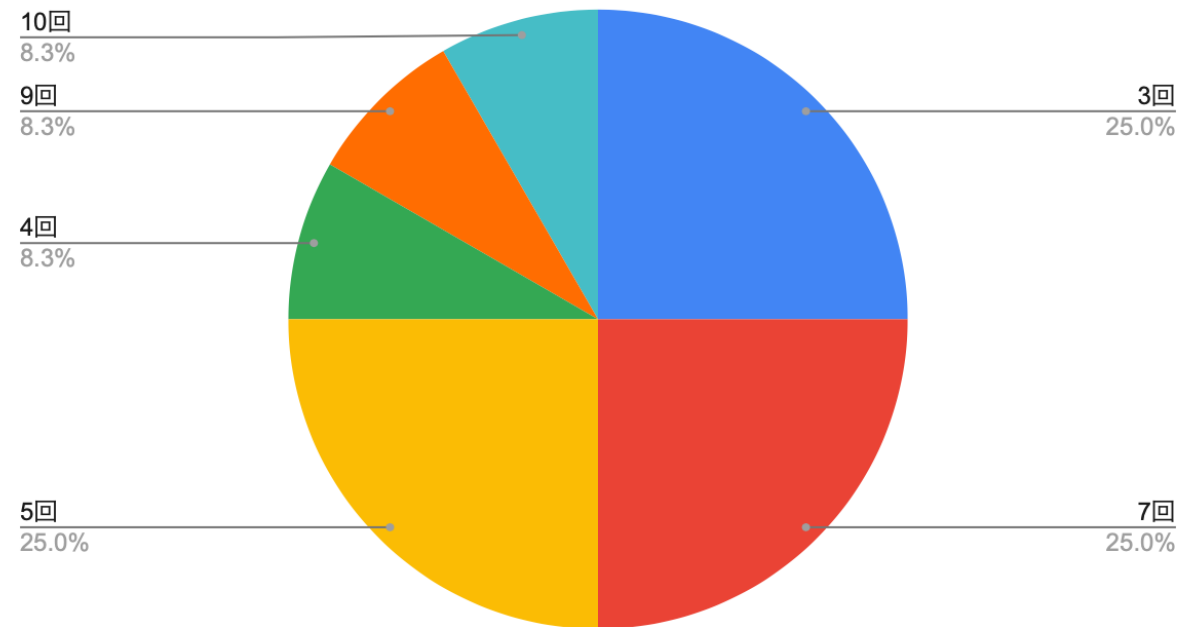
- 1) アンケート名：日本語教師と日本語交流員の協働に関するアンケート
- 2) 対象者：令和4年度佐久市日本語教室の日本語教師及び日本語交流員
- 3) アンケート実施日：2022年11月12日（土）
（当日欠席者には別途アンケートを依頼）
 - * 出席者（教師2名、交流員13名中）：教師1名、交流員8名
- 4) 回答数：12（15名中）
- 5) 集計結果の報告会：2022年12月10日（土）
 - * 出席者：教師0名、交流員9名
- 6) 考察：年度末に県が行ったアンケート結果と照らし合わせて行う

アンケート集計結果

1) モデル教室への参加は何年目ですか。

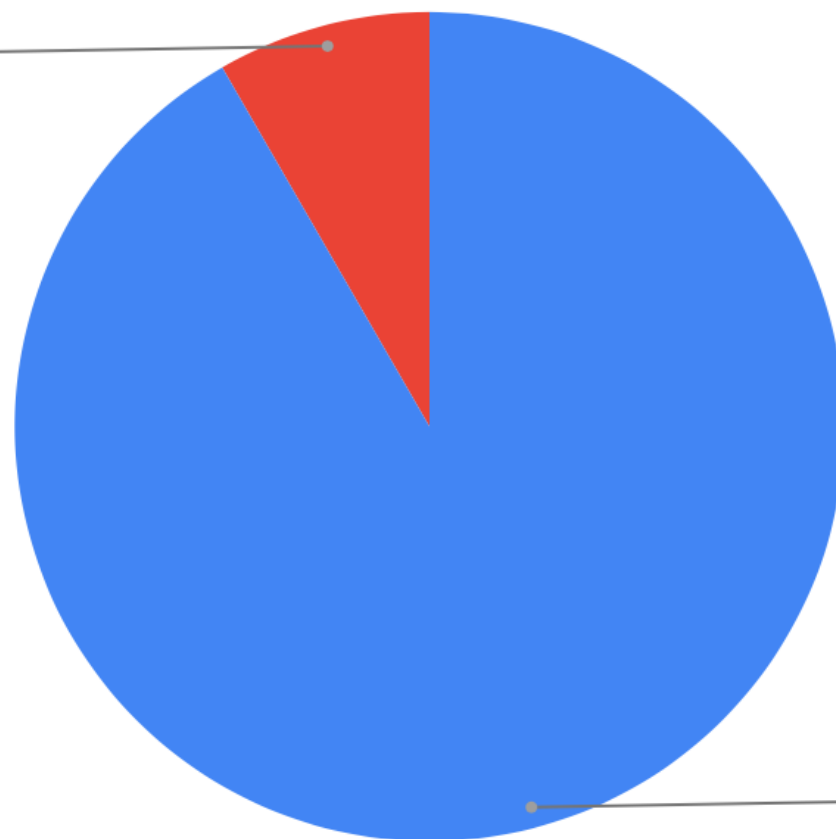


2) 今年度、教室へは何回参加されましたか。（見学を含む）



3) 日本語教室と日本語交流員がいる教室についてどう思いますか。

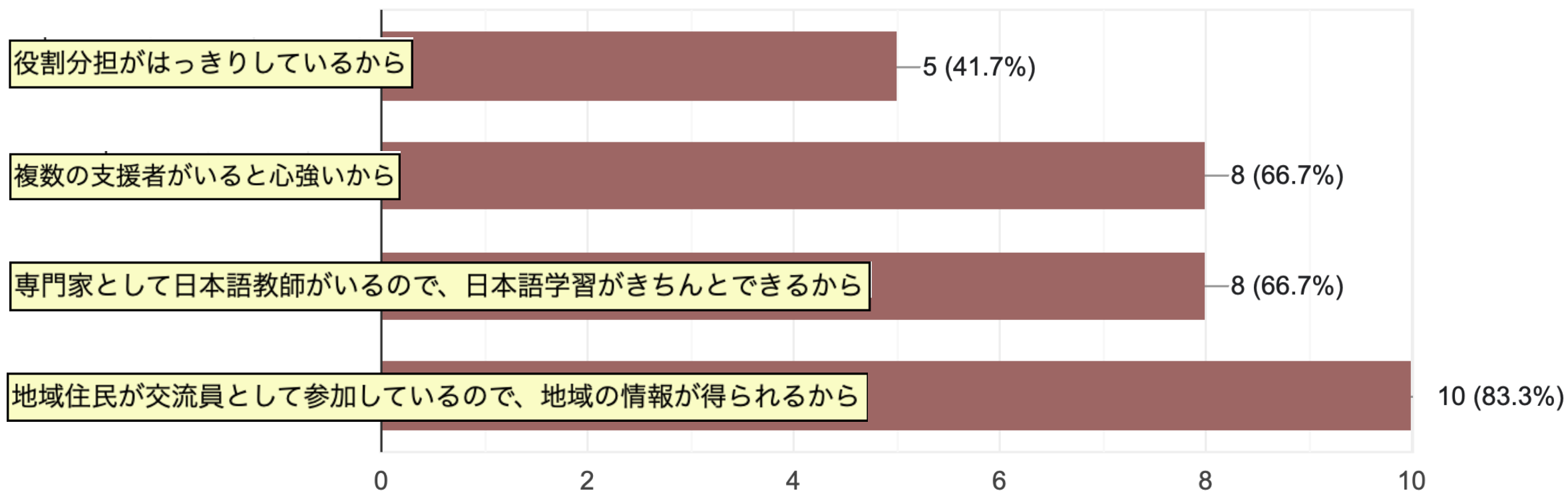
まあまあ良い
8.3%



良い
91.7%

4) 3) で「とても良い」「まあまあ良い」と答えた方にお聞きします。それはどうしてですか。(複数回答可)

12 件の回答



6) 実際に支援を経験して、活動しやすいと感じた点はどんな点ですか。

日本語教師というプロがいる事で安心して交流ができる

役割がはっきりされている。事前の準備が必要がないので楽な時間を過ごせた。

日本語教師の指導通りの学習者との交流は内容があり、難しく考えずに参加できた。

自分一人で活動するのではなく、コーディネーター、交流員、市の職員の方などいろいろな立場の方と協力して授業を作り上げる形式だったので、毎回相談しながら作り上げていけるイメージがよかったと思います。

目配りができたと思う。
学習者との垣根が低く
感じられた。

日本語教師と交流員が連携することで、学習者が打ち解けやすい（話しやすい）空気を作れる

教える空間の中で、交流員の方がいることで、情報の深まりやコミュニケーションを通して学習者と一緒に新しい気づきであったり、相互理解につながると思う。

7) 実際に支援を経験して、活動しにくいと感じた点どんな点ですか。

途中でオンラインに切り替わった点もあったと思いますが、**学習者の方が極端に参加しなくなってしまった**状況について、どのように手を打っていけばよいか考えることは大事だと思いましたし、課題だと感じました。また、レベルが定まらないので、簡単すぎてしまうというような意見が多かったように思いますが、実際はそのレベルでもきちんとできる方が少ないように感じる部分もありました。

物理的に事前の打ち合わせが足りないので、授業の流れが読めないので活動しにくかった。

学習者の参加が少ない日、活動が継続していく中での**支援者同士なかなか継続的に意思疎通ができない**ところ

交流員が学習者に対して、一方的にしゃべり続けている傾向が強く感じられました。学習者からの発言を待つ姿勢と聞く姿勢が必要かと思います。

日本語教師が話しているときに交流員と学習者さんが話していて発話がさかんに行われていて良いと思うが、ききとれない事があり、少し工夫が必要と思った。

交流員の立場に慣れておらず、日本語がわからないとつい学習者の言語で言ってしまうたり、通訳のようになってしまい、先生を越えて説明してしまうことがあった。

他の人達とどのように交流したらよいのかがちょっと難しかったです。

8) どんな点が改善されれば、より活動がしやすくなると思いますか。

学習者の文化的、社会的背景(違い等)を、交流員側が理解する場面を意識的に作ると、学習者からの発言も多くなると考えます。

なるべく学習者サンのニーズにあわせる。

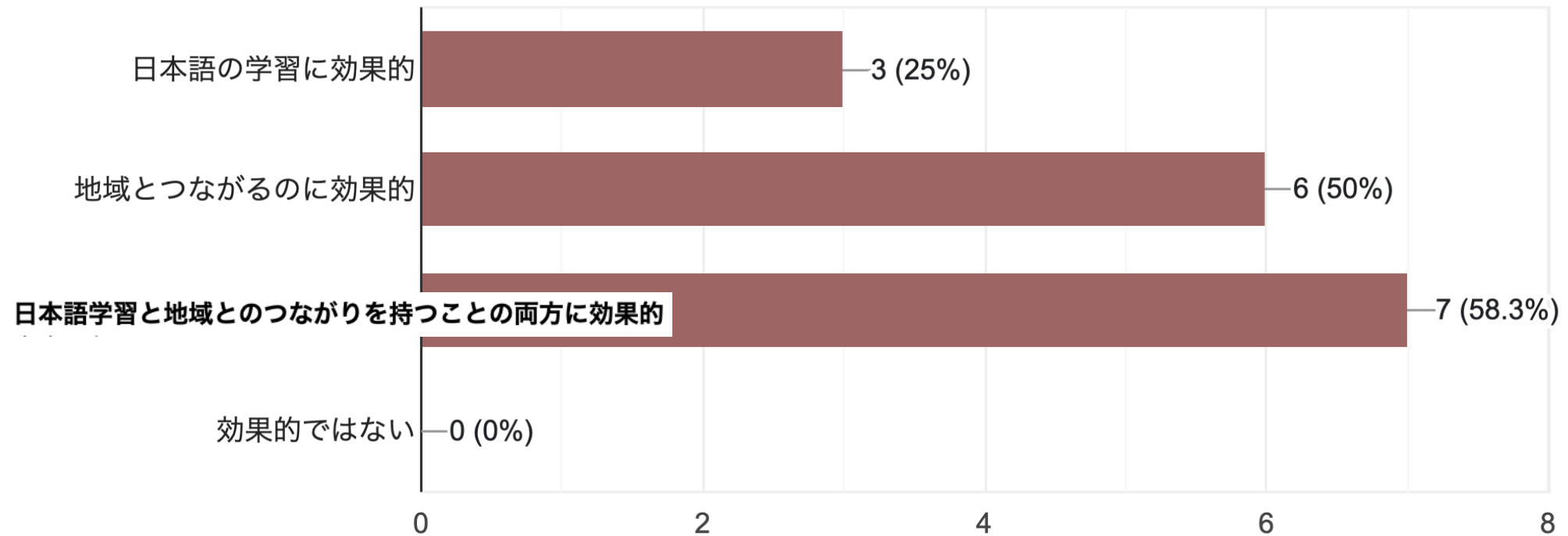
事前に参加する外国人の人達の国の情報があればいいなと思いました。

学習者のニーズがもう少しくみとれたら良いと思う。

学習者の視点を考えた上で、コーディネーター、教師、交流員が共同でシラバスを作るとか、授業の流れを作ってみる。

9) 今回佐久市で実施したようなモデル地域型日本語教室は効果的だと思いますか。(複数回答可)

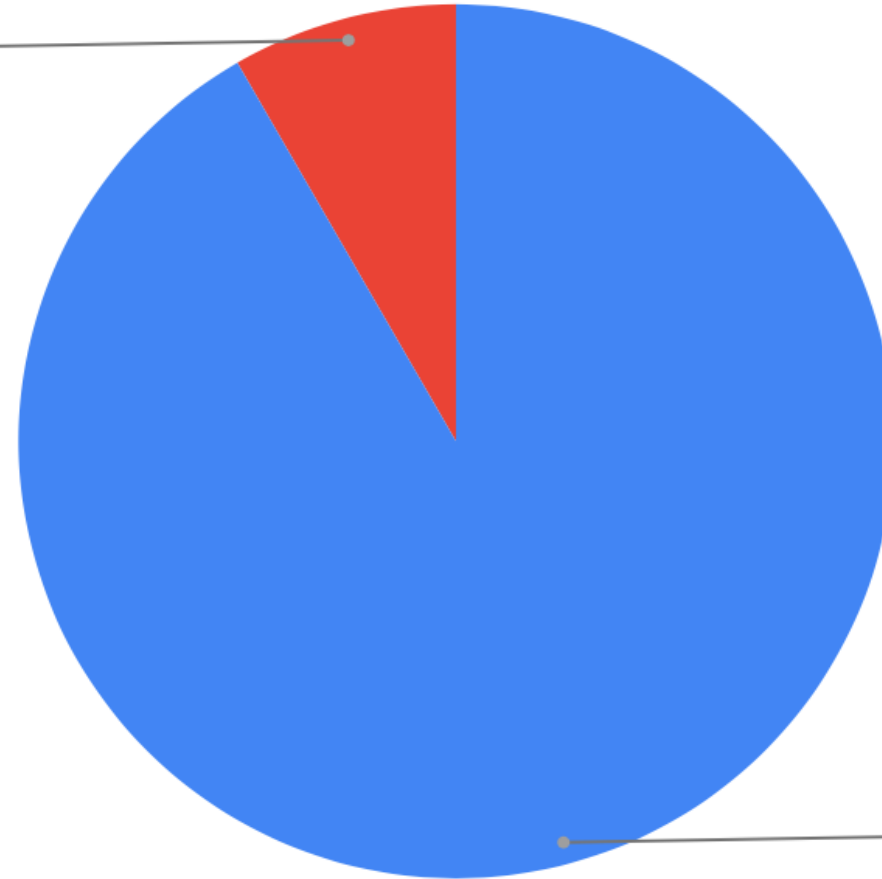
12件の回答



10) 今後、モデル教室の自走教室が行われる際は支援に参加
したいですか。理由も教えてください。

参加できたらぜひした...

8.3%



参加したい

91.7%

4. インタビューとアンケート結果からの気づき

インタビューやアンケートから以下のような現状が見えてきた。

- 日本語教師と日本語交流員がいる教室の形については、参加者の多くが好意的に捉えている。
- 支援者側は、日本語学習効果よりも地域を知ることにより有効性を感じている。
- 多くの人が、教室内に違う立場を持った存在がいることで、心強いと感じている。
- その一方で、教師側はコーディネーターや交流員がいて、授業にやりにくさを感じている。
- 事前の打ち合わせや支援者間の交流が足りない、なかなかできないと感じている。
- メンバーの中にはもっと自主的に教室運営に関わりたいと考えている人もいる。
- 参加する学習者の定着を課題と考え、ニーズに合った教室作りの必要性を感じている。
- 参加した学習者は以前より地域での生活がしやすくなったと感じている。



「効果的な協働」を実現するためには、まずは協働の場となる教室を共に作り上げていくことが重要。その上で、教室内では適切な役割分担が行えるよう、十分に話し合う機会を作っていく必要がある。

5. 実践を通して「行ったこと」「考えたこと」

「行ったこと」

- モデル教室に関わる教師、交流員との対話
- アンケートをグループインタビューの形式にすることにより、コーディネーターはもとより支援者同士が対話し、教室について考える時間を持つことができた。

「考えたこと」

- 地域教室での支援に対する個々の意識について
- 話を伺う中で、日本語教師と日本語交流員の教室参加に対する意識の違いが見えてきた。
- 交流員側は「楽な気持ちで参加できる」と感じている一方で、教師側はコーディネーターや交流員と連携をとっていくことに難しさを感じており、この点については今後しっかりと検討していく必要性を感じた。

6. 課題解決に向けた実践を通じて、 地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割

一人一人の話を耳を傾けることで、それぞれが持つ考えや思いに焦点を当てる機会を作ることができた

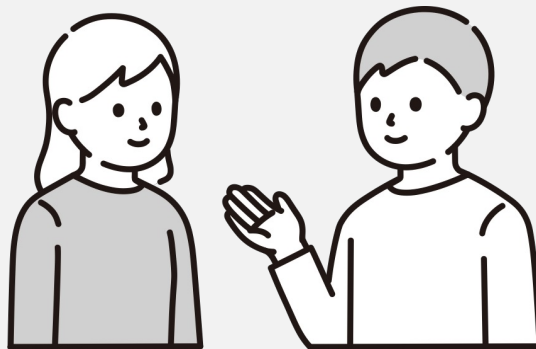


誰かが聞いてくれる、誰かに伝えられる、困ったときに頼る先があるということは支援者にとって必要な、ある種の休息の場であると感じた

自分自身はまだその役割を十分に果たせたとはいえないが、今回の学びを今後活かしていきたい。

7. 地域日本語教育コーディネーターとして 自身が大切にしたい視点

地域日本語教育においては、
関わる人それぞれが多様な考えや思いを持っているということや、
地域教室は学習者にとってだけでなく、支援側にとっても居場所
であるということを常に念頭に置きながら、
対話を重ねていくことを大切にしていきたい。



8. 実践において、難しいと感じたこと、 今後に向け知りたいこと

難しいと感じたこと <コロナ禍における、支援者同士のコミュニケーション>

以前はあった、学習者や支援者同士が教室後や休日に誘い合って食事やイベントなどに参加するといった交流が途絶えてしまった。

2年間継続して参加していても、お互いのことについてほとんど知らない

コロナ禍で同じような状況の教室が多くあるのでは？

顔を合わせなくてもコミュニケーションが取り合える仕組みがこれからの教室運営には必要。

今後に向けて知りたいこと

＜地域日本語教室において、多様な人材が活躍するためには？＞



教師側にとっては地域日本語教育自体が馴染みのない分野であったことに加え、授業に関しコーディネーターや交流員とどのように関わっていくべきかを難しく感じていた。

交流員の多くは教室のある地域に住んでいる
地域住民→実施した教室のコンセプトや活動
内容との親和性が高く、活動に意欲的。



まとめ

今回の実践を通し、日本語教師と日本語交流員の効果的な協働を目指す上で必要なものが少しずつ見えてきたように感じている。

また、学習面や地域参加に効果的なだけでなく、参加者の相互理解や、居場所としての教室作りなど多方面に「効果的な協働」となるにはどうしたらよいか、今後も引き続き考えていきたい。

ご清聴ありがとうございました

